観察（みる）

どのように地域を打ち出すか

研究所長　七戸長生

地域の社会経済の活性化を図ろうとする時、どのような地域の拡がりが望ましいのだろうか。私たちはほとんど慣習的に、北海道という、東北六県と新潟県をあわせたほどの拡がりをもつ広大な地域をひと括りにして、その危機を論じたり、将来展望を語ったりしているが、それははたして戦略的に意味のあることだろうか。

地域の活力というときには、何よりもそのモトになる個々の主体的な活動のエネルギーが中心になる。しかし地域としての経済力を存分に発揮するには、そのために一致協力する人々の求心力が問題となる。だが後者を強調しすぎれば、個性的な活力が見えにくくなり、逆に前者を重視しすぎれば、地域としてのまとまりが失われかねない。この両者のカネアイをどのように保つかは、誠にむずかしい課題である。私たちはこの点をどのように考えていくべきだろうか。

もう、かなり以前のことだが、九州で永年、農業経済問題を研究している著名な研究者から、こういう言葉を聞いたことが頭に残っている。「私たちは通常、北海道のあなたがたのように、地域全体を大きく引っ括って〝九州の農業〟というような大まかな議論をすることがほとんどない。そこにあるのはあくまでも福岡の農業、佐賀の農業、あるいは鹿児島の農業等々であって、それぞれに歴史、風土、気風を異にしており、これをひと括りにして九州の農業というのは、統計上の虚構に近いような感じがする」。

これを聞いた時には、成程、さすがに歴史が古く、負けん気の強い、個性的な県民性が強調される土地柄では、自然にこういう観点が打ち出されるのだな、と単純にうなづいてしまったが、よく考えてみるといろいろと引っ掛かることが少なくない。

北海道だって、同じようにそれぞれの地域の個性や開発以来の歴史の流れを考えると、それをひと括りにするのには無理のある面がいくつもある。例えば、すでに江戸時代から先人が開墾の鍬をふるってきた道南の地域もあれば、第二次大戦後の開発で急速に展開した道東の地域もある。お互いに「奥地」と呼んだり、「先発後進」と蔭口をきいたりするのも、

地域的な対抗心の発露であろう。

また、戦後五〇年の間に急激に農業の形態分化も進んで、それぞれに酪農地帯、畑作地帯、稲作地帯を形成しているから、これらの形態差を度外視して、ひと括りにして論ずることには無理がある。実際にも、畑作と酪農をやっている「混合経営」や、稲作と酪農をやっている「水田酪農」といった経営タイプの農家は、今日ではほとんど姿を消しているのではなかろうか。

しかし、こういった歴史や形態の違いを超えて、「北海道農業」という共通点でひと括りにできる側面があることも事実である。それは、ブラキストン線（注）の存在からも裏付けられるように、府県とは一線を劃する自然条件の差異であって、いかに農業技術が発展した今日であっても、この亜寒帯的な風土条件は北海道共通のものといわなければならない。さらに忘れてはならないのは、北海道が負っている共通の地理的ハンディキャップであって、この制約のせいで、個々の地域の特色を強調するよりも「小異を捨てて大同につく」方が経済的に有利であるという点が指摘できる。つまり、北海道は府県から離れていて人的な交流が浅く、マスコミなども含めて概して個々の地域の知名度が低い。そのため個々の産地の特色を売り込むよりも、雄大な自然をイメージさせる「北海道という共通ブランド」の傘の下に入って、流通対応をとる方がメリットが大きいのではないか、という大局的な対応姿勢もありそうである。

しかし、今後の北海道農業の進路を考えるに当たっては、従来のように「北海道という共通ブランド」の大船に乗った気分で、その行く先も戦略も、すべて他人まかせ、あなたまかせの大まかな姿勢をきめこむ状況ではなくなっていることも明らかである。この点からいうと、今、全国では各県が各様に、それこそ血まなこになって活路をつかもうと努力しているのに、北海道がそのような形でいると、いかにもノンビリと「官依存」のヌルマ湯につかっているように映るかもしれない。かなり我慢をして「一枚岩」の団結のために協力していても、その求心力が他力依存のように映っては、誠に不本意なことだ。

やはりこの点では、それぞれの地域の特色を高らかに打ち出して、その存在感を強くアピールしつつ、遠隔地であるというハンディや知名度が低いという弱点は、多くの人々が好感を抱いている北海道という大きなブランドを活用してカバーしながら、支庁単位のまとまりをベースにして積極的に売り出していくことが基本戦略になるのではなかろうか。

（注）津軽海峡を境に南北に分けた日本の動物分布境界線。英国人ブラキストンの命名。